

紀伊國名所圖志 三編
西之卷下
高野山

ル 4
1833
15





團三郎碑 本社の西にあり建久四年鬼王丸
有王丸墓 本社の西一丁

源平感哀記

俊寛僧都の女父死と歎く条

姫君涙み咽く物も仰せまはば出家の志有と仰りまは有
王丸免角して高野の麓天野の別所といふ寺(具)
奉らて其ふく出家し給ひふくり真言の行者と仰り
父母の喜提と吊ひ給ひふくり其有王も其
より野山小登ると奥院小主の骨を納め卒都婆を立
て即出家入道して曰く後世を吊ひくり

- 子日權現社 日西ふあり縁起
- 龜田大隅守碑 下天野村ふあり龜田氏の浅野氏の
- 小都知峯 丹生結門ふあり今
- 二川鳥居 天徳寺ふあり八丁許にて

丹生高野兩大明神の華表なりそ高き一丈七尺廣き二間
山上壇場兩大明神の一乃鳥居なり額字ハ羽良の僧宿

○古佐布村 古佐布村の下の谷を丹生明神遷幸の地と云ふ

○梵字岩 二ツの石なり

○應其池 梵字の池なり一丁林田村の西あり

○地藏堂 羽田村

○笠木坂 傍のたきかたの坂なり

扶桑墨記

寛治二年二月廿四日申尅御笠木坂立二一間一画屋下
宇檜皮菅南面懸翠簾為御所引参議 右大辨藤原朝臣 通俊 白河上皇高野御

参詣記

○日光月光窟 中宿にあり

○矢立茶屋 四軒茶屋なり

此所町公道と若山道との追分を茶店軒と云ふし
獵場明神の射せしむる矢の立と云ふ杉あり矢立枝

津陰記行

故とすのじと枝の名れはさなるをさす木の幹

○鏡字池 道の側あり

今此の阿波の大滝寺の栄儀と云僧あり夢中り
高野へ登詣し矢立の茶屋小端居し此池と云ふは
水上小鏡字と云ふ光明を放ちり側一人の僧あり
の此と云と向ふまは鏡字の池と云ふと云ふは其の
後のまふまは池水と云ふと云ふは水底小楠あり
鏡字と云ふは乾の角小置りて筆勢凡俗の及ぶ所
わす是必大師の御筆なりと云ふと云ふは傳へ



押上石

鑲字の池よりなる此水と飲する心神爽快と

○ 智恵百倍と云ふ
 殺屋の前より本尊の大師より土砂を練りて俵に盛りて人々を
 地蔵堂 赤坂 大門とのろと五十丁通と云ふ

○ 袈裟掛石
 袈裟を掛ける石なり

○ 捨石
 捨らるる石なり

○ 浪川 御道のたれ
 浪川は御道のたれなり

○ 押上石 坂の石
 ひりー大師當山と聞くとむい堂塔建立ありと云ふ世間
 へ普くきこえん一々母公隨喜の堪へどいへびを靈境を
 踏むとてけるぐ山下ふれと云ふ大師の迎へとせ

洋 左

後石

枯葉

あふふ

あふふ

あふふ

あふふ

あふふ

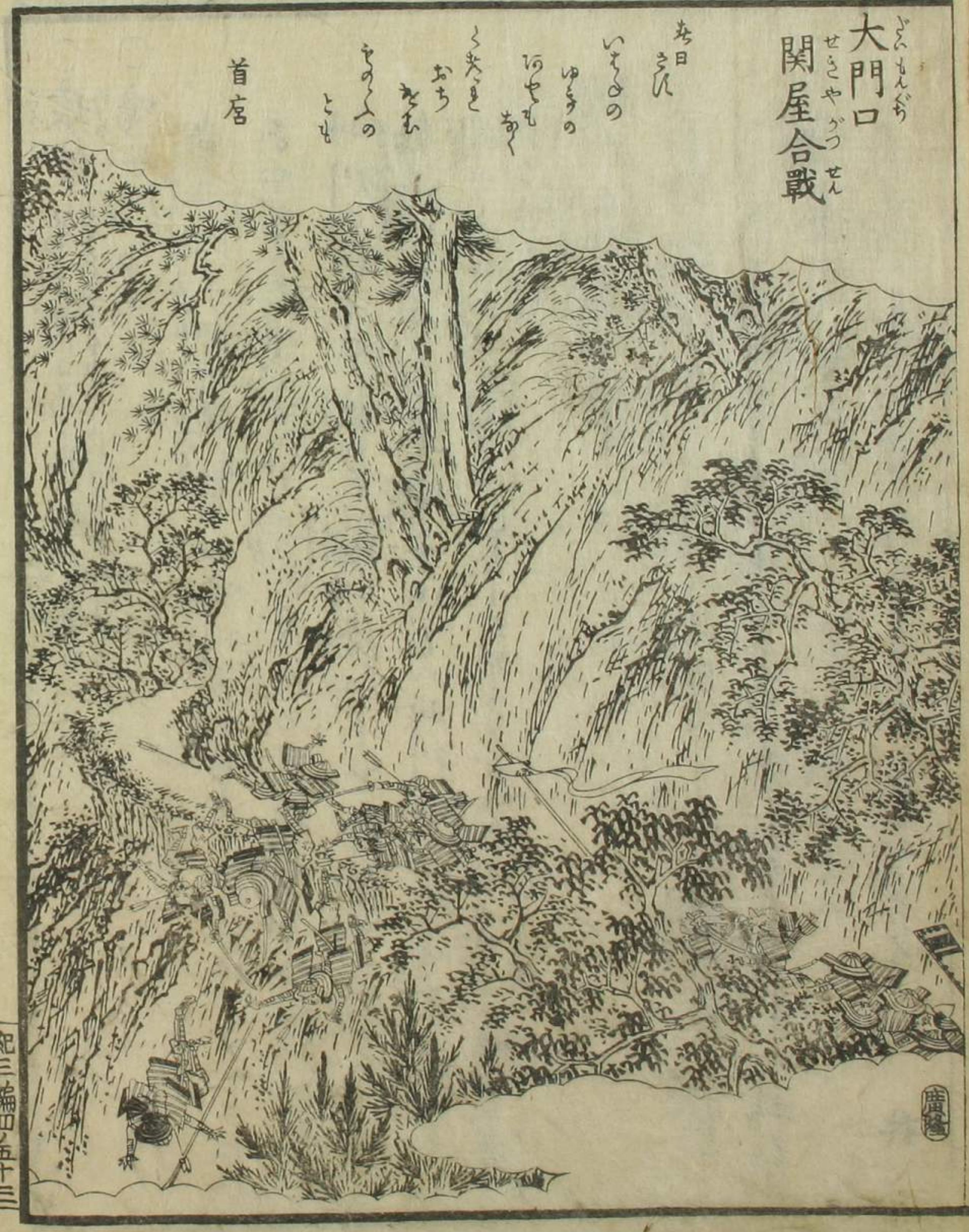
あふふ

あふふ



紀三編四十五十一

我中々女人のいづき地ふあどおひとまり
 少くもぐふ練ゆまひいーかども母公さうふ安入まはる大
 師のまゝやう強く登りいとどるさい是を越せまると御
 袈裟と石ふ熱うは石をい今如袈裟石と称すて母公
 石と越むとと忽五障の雲あひいさう霹
 山谷は震動火の雨は中ふ大龍現るまおと一歩も進
 むと能うば母公大ふおるさ宿世の罪業と歎と憤て傍の
 石と捨たま今是と捨るとら大師は時秘文を編
 右の手とてまの大盤石と押あげ母公を覆ひまひとる
 その御手形今かや巖面ふ顕然とるか希有のまふ達
 らずなりなり母公その日涕泣まふあまを備とかりと
 号く涙川といひ火の雨降るてとと焼尾とらひと千載の今



大門口
とんもんち
 関屋合戦
せとやがつせん

春日
かすひ

いづのの

ゆづの

河せむ

くたむし

おち

おむ

とむ

首店

紀三編四十三

廣隆

わつふ口より七千余多由森口長御ののりくふら小坂中の
進所あり一方はからくく大磐石重もき峙ら一方は數
百丈のがけなり一騎もちの所なりふは法師家のげふかく
とをるく一物の滄なりとりくくる武者を馬上よりはき落く
くねもく馬人としずいもごよちりりくくる勢もく
先陣のちやうなるふちげくゆくも千なり又ハ日替ふ
りみあれる谷もつくの數をあげる也は昨ハごり十
人よちえぐりくも數千人としまご留ふくくこまし金地
の利ふくるべー

○護摩壇方

毎年葛城先達去の所を柴燈護摩と修すと例と此
所より南へ右へくく大門の二面へ出ると古道を迂迴な

○見越坂

くくくく通行する者なく大小廢すましても町石を存せり
あまとう今の街道と長坂とりり

此坂より遙く西海に
見越坂より遙く西海に
と越坂より遙く西海に
と越坂より遙く西海に

わごの糸をとりんわ子流活るあめる一首ぞあり濱名浦雄

○化粧坂

旧の如小堂ありてけい粧堂としるの掛作里ありしけ堂として衣とそ
化粧坂としる後者見る禊ぎ長坂としるひなり
志保傳説書寺ありて長年五月救免の宣下あり八月十七日あり
二邊國の石碣に建長年五月救免の宣下あり八月十七日あり
紀伊丹のあれあり奇も多くありまの書録書長坂としるひなり

○雪下の棚

冷泉常備あり
松あり

當山結東の内外松樹林とかりて千歳の翠と争入とひとと
悉皆雌松ありふらり此木の雄去かり年奇といふ一
西行上人登嶺のときけ本を怪し風詠とありてあひは
空中よあわつてそ詠ふる一も故不ぞく矢松と入とぞ

○ 下乘牌 七口とひか

○ 女人堂 大門の側あり洋小不動坊

一條院の御時や時の撰政御堂白道長の御女二歳ふあ
せしむるご后をまんと思食かつて給ひる程よ少
惱みあつゝ息を給ひぬわまりふかあつて思ひまひる
まふいふと助多とありいぬぐり給ふ多々の大御室ふ
それりくあふれと綿の袋小姫君とく我御領よりけ
くさやふの地登りて本のみ御まうし給ひるまふ細
なつはあせとと女人堂は熱門の内へ入るまうし

禁制記

五古むろと持く門の外あつて加持し給ひるまふ獲生
遂ふ后ふとせしむる上東門院の女院とまかり
正和二年八月八日 後宇多院御幸まうし給ひる近里の
女とと拜となてまうし給ひる男の姿ふよとて結東の
中ふ入んとせしむる俄ふ雷ありてき暴雨沛然として
空すまうし降るまふ堂衆等數十人技をりつて大門
の横峯ふら向ひ拂ひるし陰や忽消く日
光朗くと晴るるぬまのう 上聞と達し 法皇弥
靈地の効験と盡し給ひるしとて 今結縁のまふ結東の外
俗を常ふ懺悔するまふ

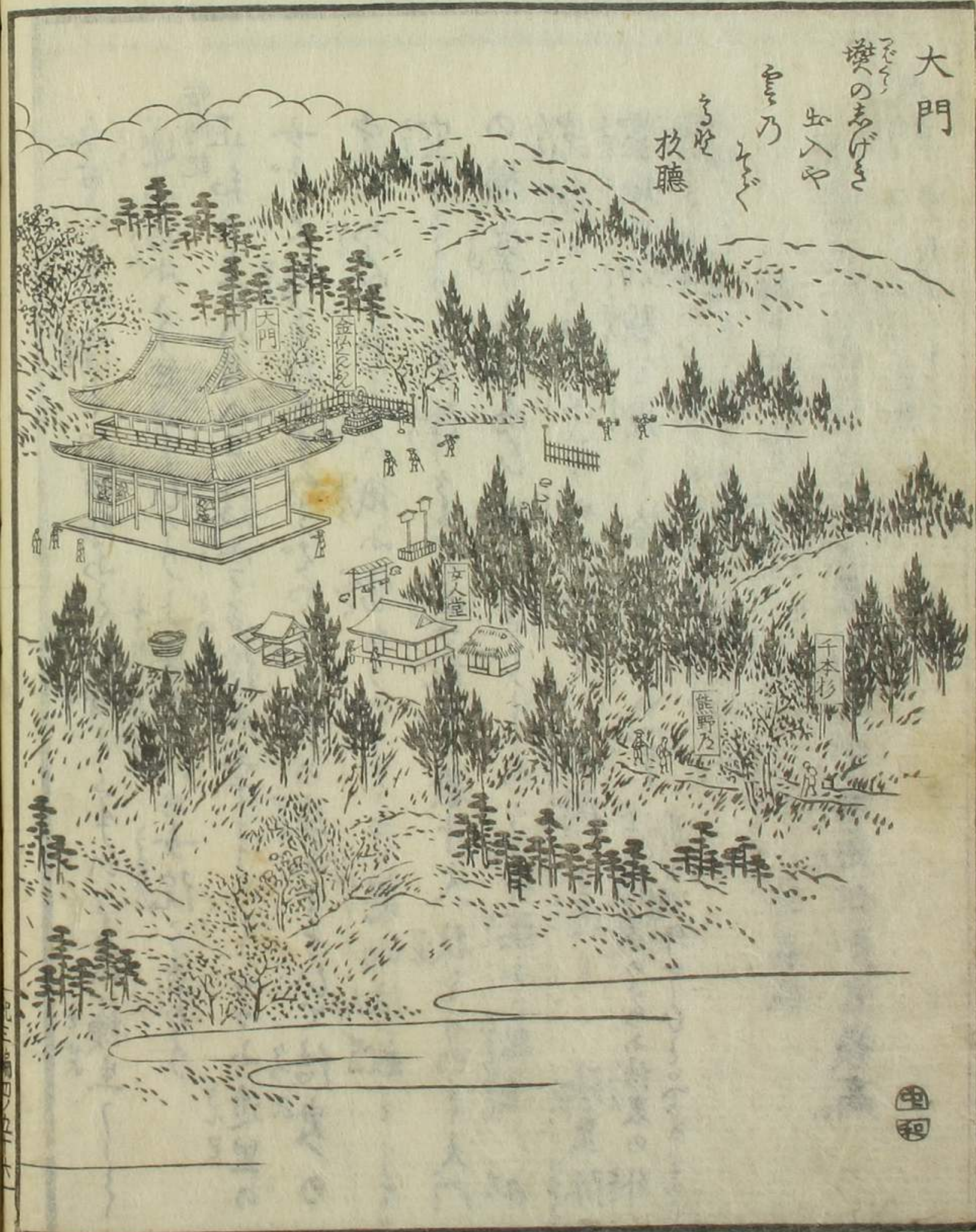
題 女人堂 右自注

神易興

○ 大門 法関何堅固淨泣 女兒曹不見祇園遂但知金嶺高
中巻ふと



大門の天姥まや
はるきの園



大門
 變のまげき
 出入や
 せいの
 せいの
 せいの
 枚聴

田和



陽明やまの
あけまる
仏供岩

泥田坊

まき
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる
あけまる

天



長福院山

西行松

文方

四ツ方

法修

吉

猿

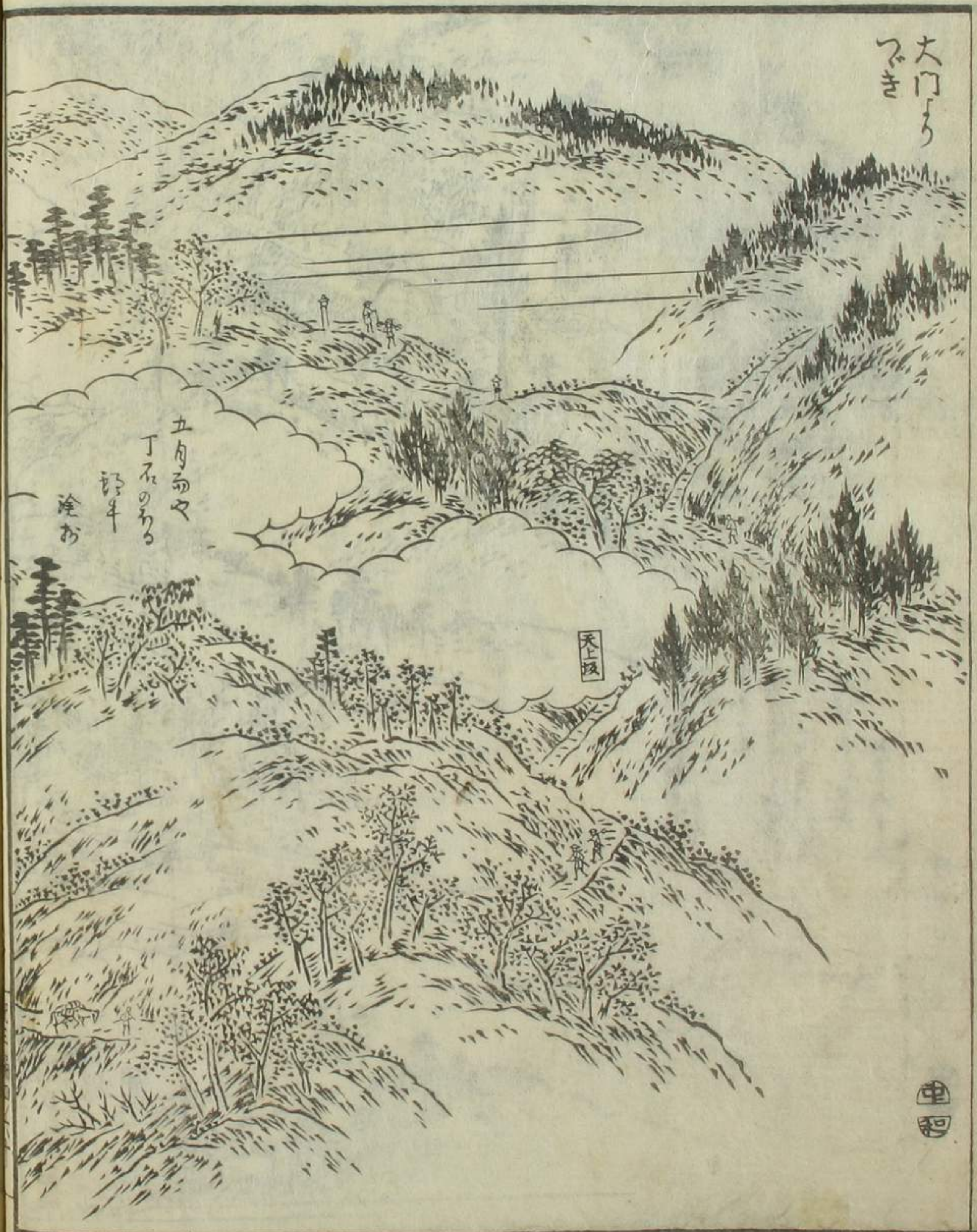
石

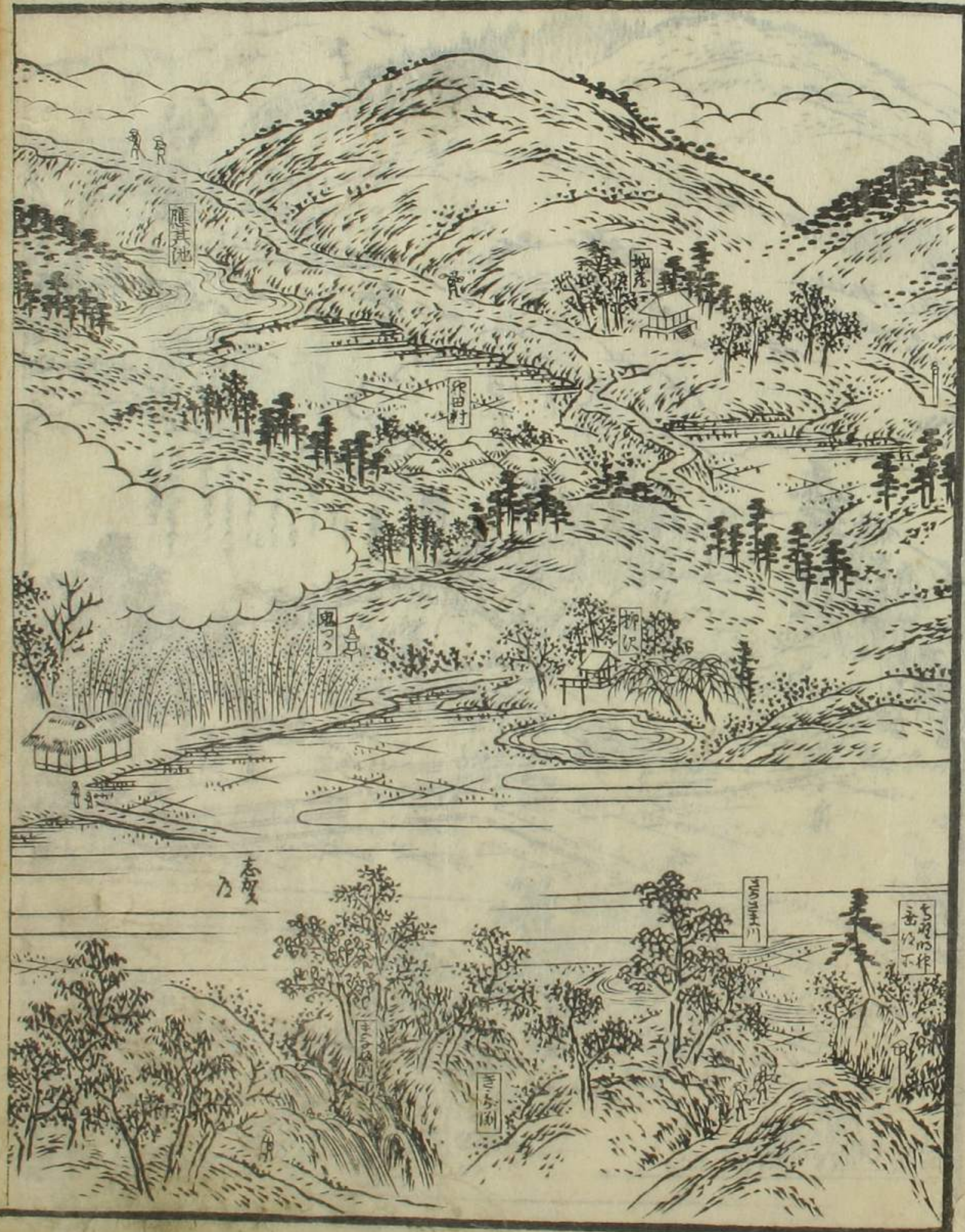
石

印





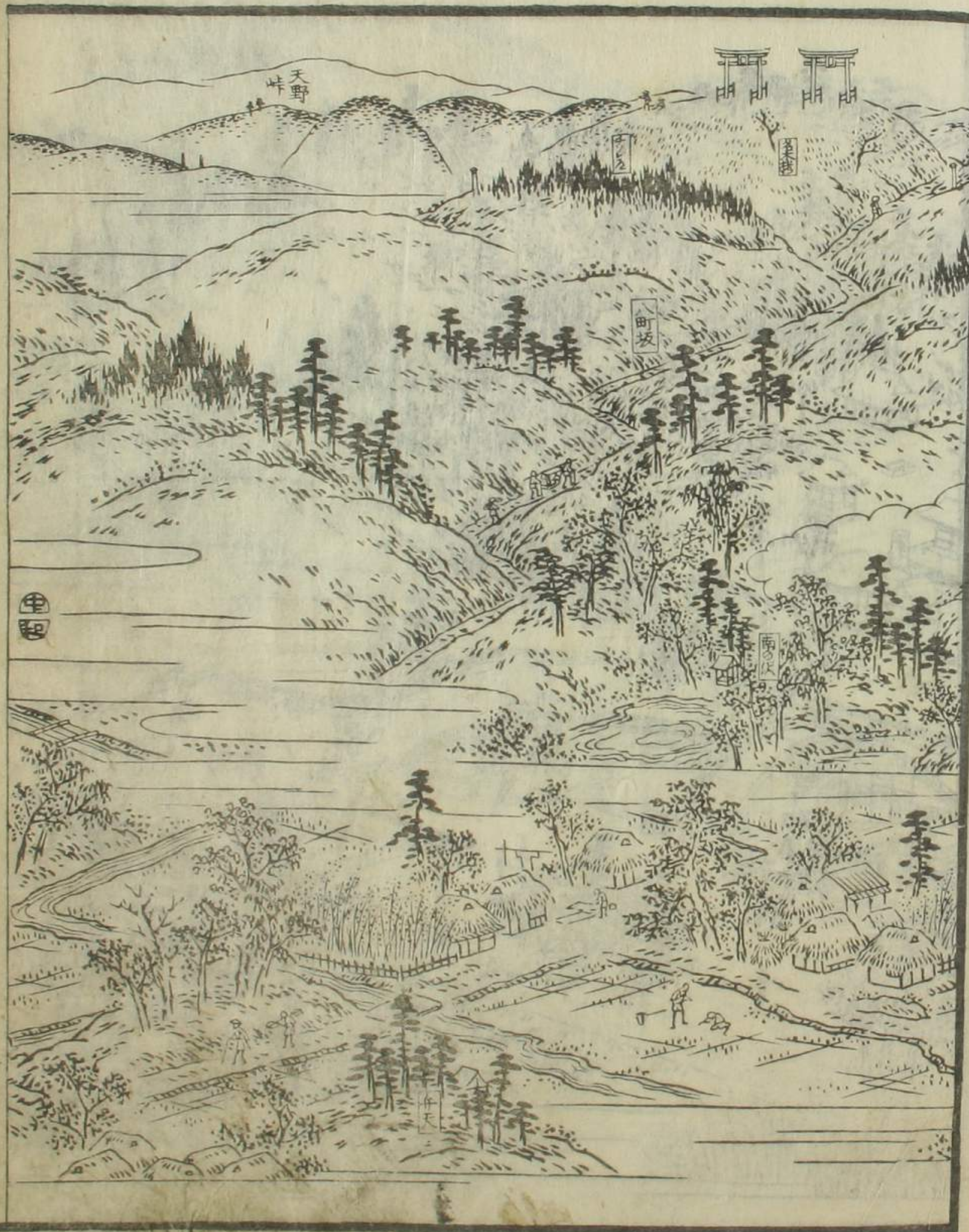


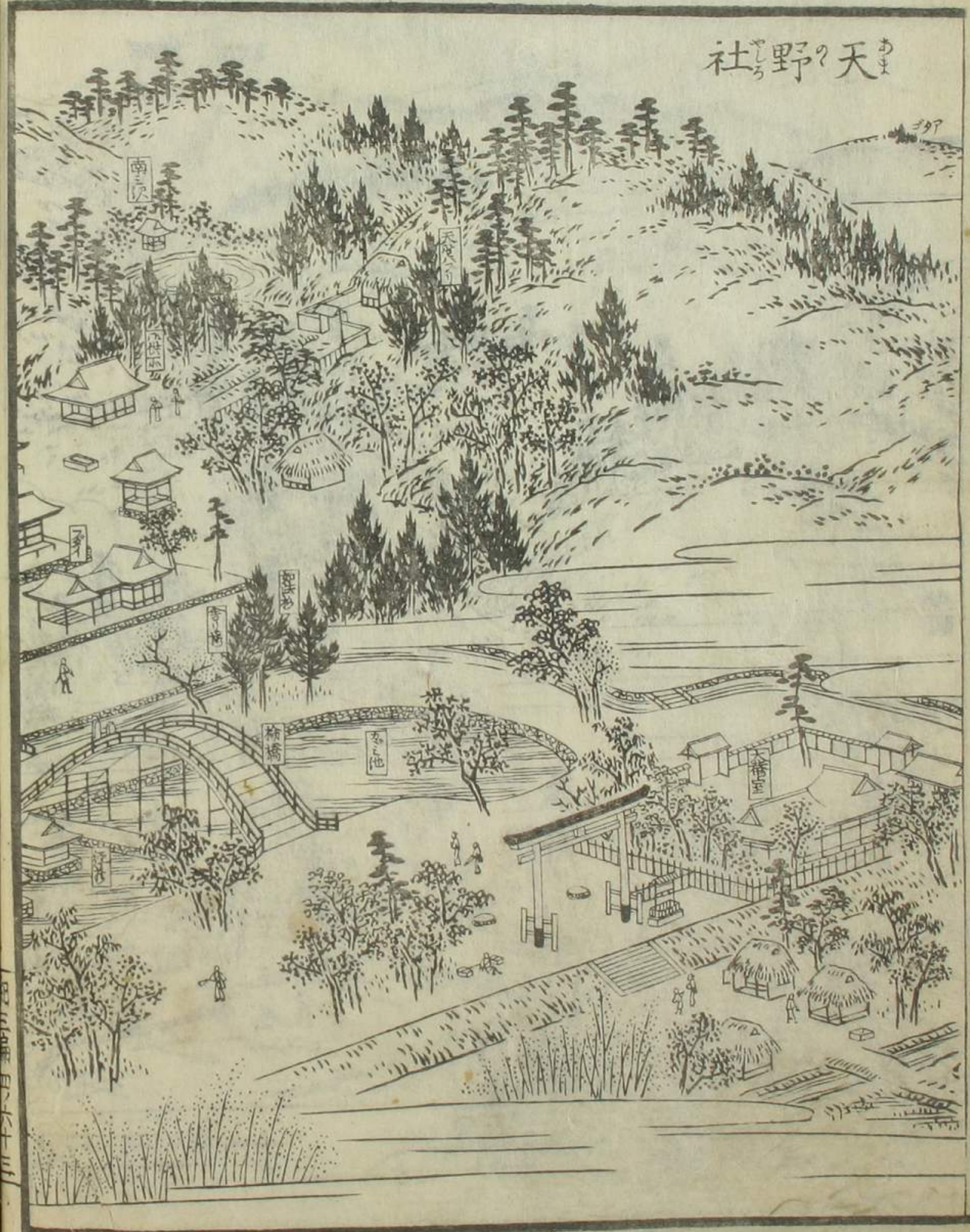


大門口の景色

白石
 二ノ宮
 三ノ宮
 上枝

小助
 三ノ宮







下山到慈尊院途中
 回首嶺頭雲已封
 俯頭山脚暮煙重
 危坡未盡斜陽盡
 直下暝然報寺鐘
 海嶠



天野下
 金山剛山

不動坂口

清水川 橋本及東家渡り

清水川 橋本及東家渡り

清水川 橋本及東家渡り 橋本及東家渡り 橋本及東家渡り

夜の念仏を聴聞しあわし

軒茶屋 紀川の南岸にあり橋本及東家の渡り

三軒茶屋 二軒茶屋に接す

截堂 六地藏とて六輪ありその一なり

西行上人像 長七寸許 西行は地まみり

西行上人像 長七寸許 西行は地まみり

衣懸櫻 堂のありあり 光嚴院法皇の御衣を懸けたる櫻の

太平記光嚴法皇御臨幸の條

日と経て記伊川と渡らせ給ひるとき 橋本朽くも危き

芭蕉

橋可折

葉摺あり御足冷く御肝消く海りう松させしむいふれど

橋の中ふら迷ひくみするを誰とみさげ如くさるふの

色不待と張る也目眼するをぞらうひやんてくる

武士七八人係よりあそぶるが法皇の橋にふくせしむ

さるをえん此の傍の松蔭にたふるもかきよはる

急死さのしら橋をわらわと流さうしあふの流ふわれ

かして柙のけ進せせられは法皇の橋のよより柙はこれ

ささすまひて水小沈ませしむふらる 唯えあは流橋やと

く夜なきながる飛入る引まのせしむるが御膝の宏の

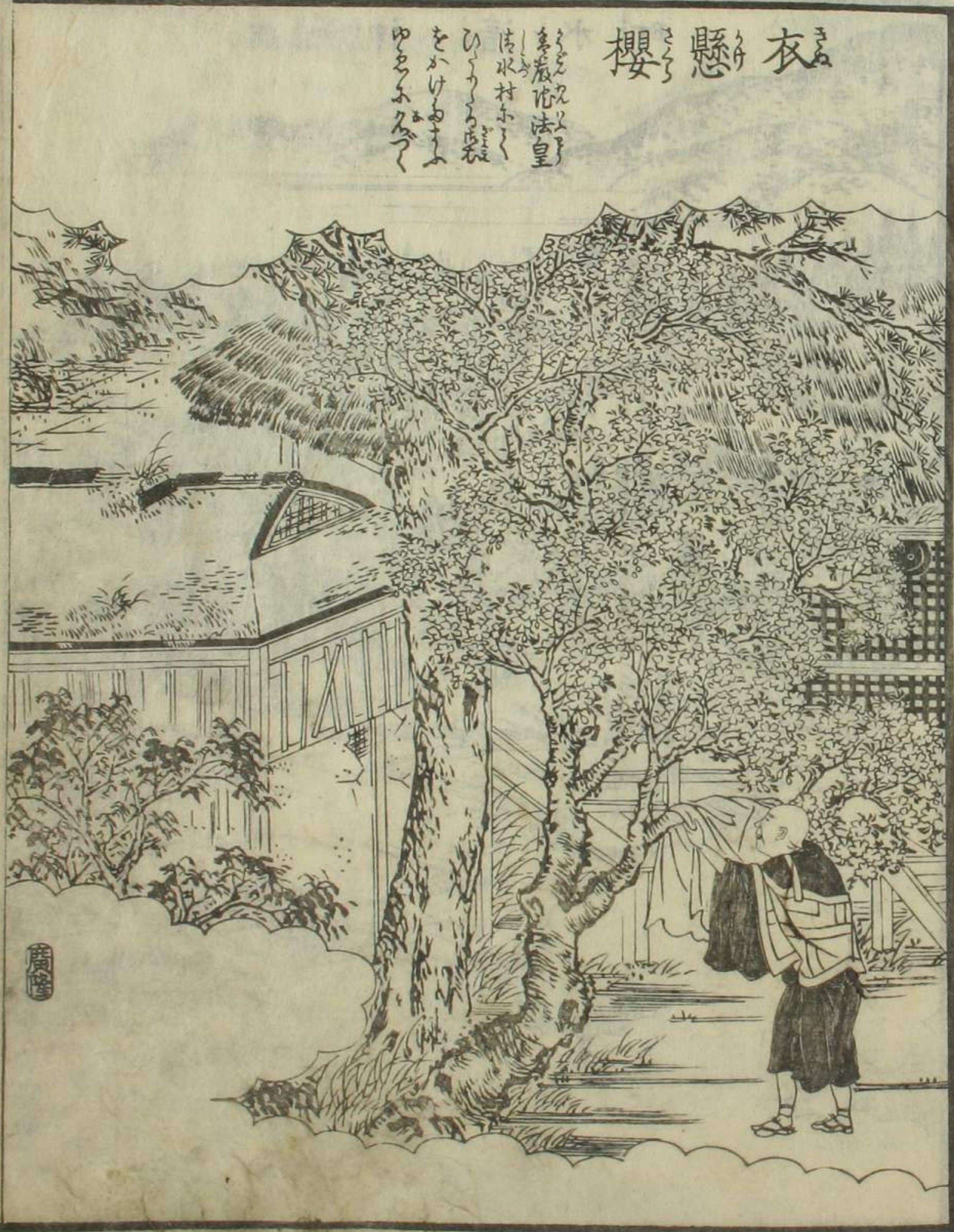
かよふ南をそ血ふなりい夜の水小流りてあがりえびなり

侍かる辻堂へ入る進くせしむるが御膝の宏の

右と流る事やあふべしと君はもふ控るをさすうふ思

る出づれば涙のかる御膝の宏の

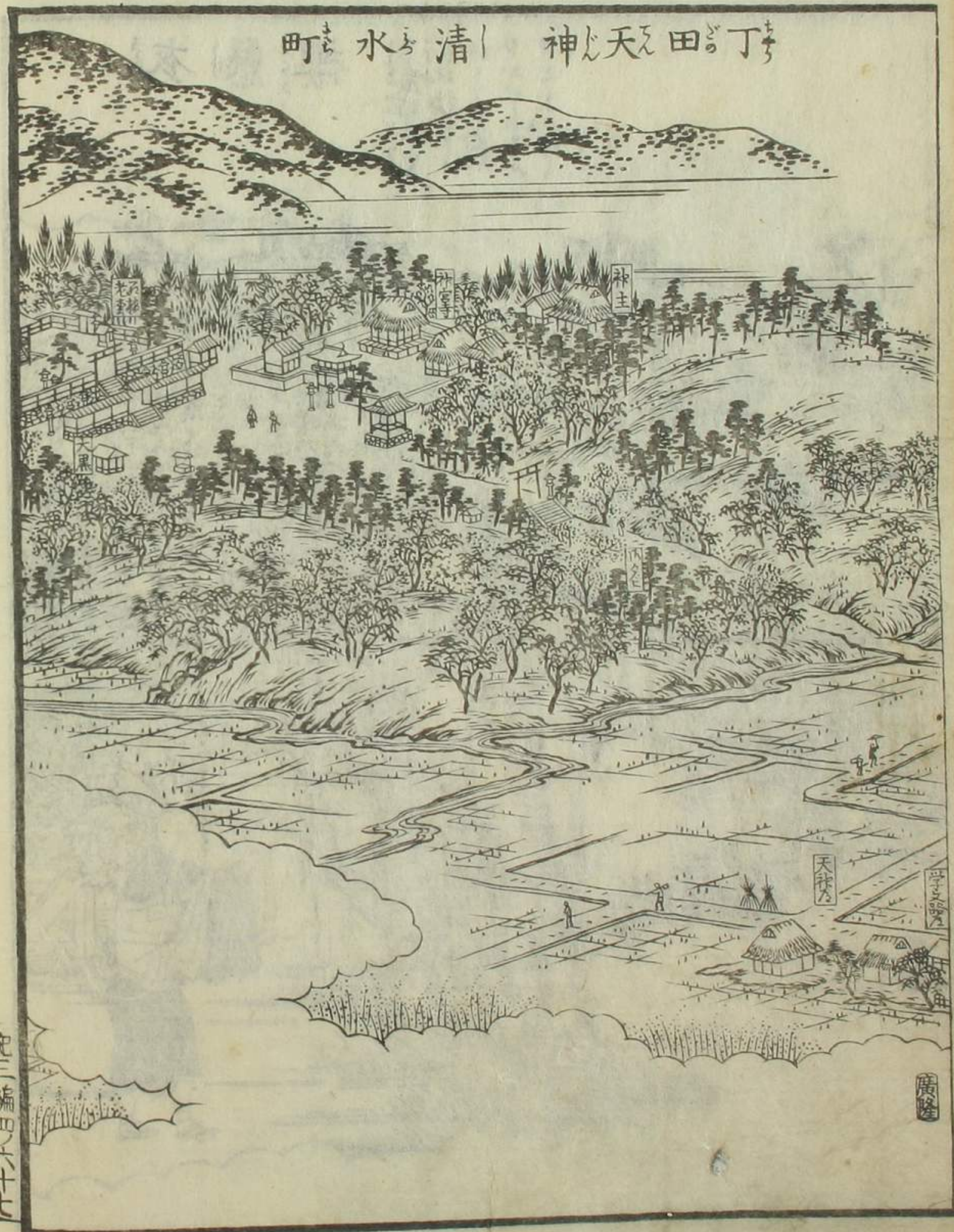
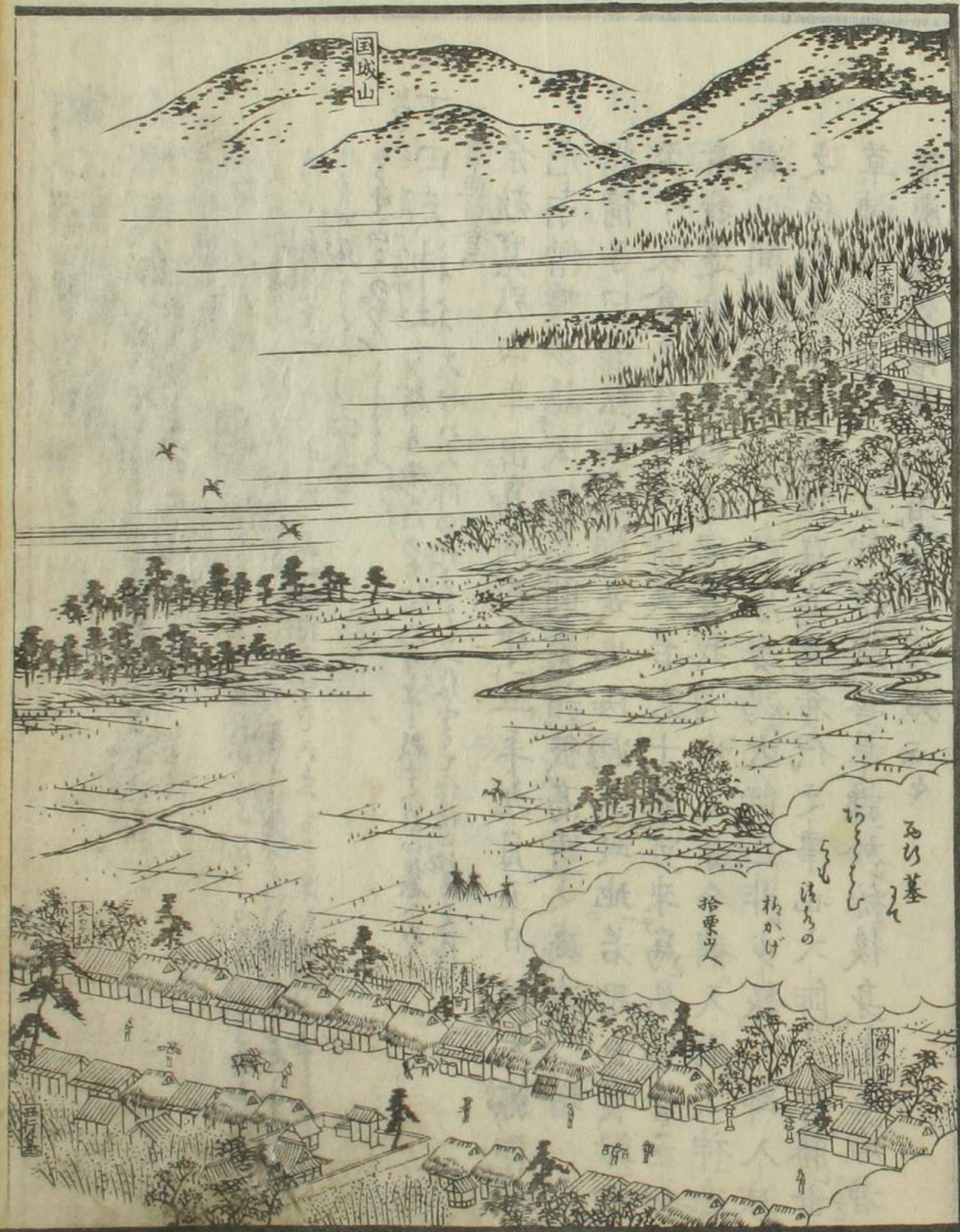
衣懸櫻
 多羅尼法皇
 清水村
 ひょうろく
 をかけぬ
 ゆめ



三



和編四六六



○ 鍊不動日村の内小あり

○ 生地氏裔右衛門尉繁氏の子

新撰長祿寛正記
右衛門尉繁氏の子...
天保八年九月五日...

○ 丁田天神日村の御座り
政事要要云

余胤寛弘四年出為河内守五年九月五日往大縣郡普
光寺僧幡夢語云媿之間夢詣彼高野之處有一宿德僧
謂倚子曰吾弘法大師是也汝遲來此地若思衣食難歟
至于衣食吾自可典持天台六十卷可來為見也管丞相
者我違世之身野道風者我順世之身今稱天滿大神遍
滿世間結縁衆生也幡夢夢謁大師已非少縁大師入滅
之後其身不亂壞猶在高野希代之事也大師才智勝世
草諫得功丞相足才智道風善草諫於稱後身尤有感者
幡夢頗勤修學仍有此示現歟云々

○ 學文路此村の舎多一玉屋と云

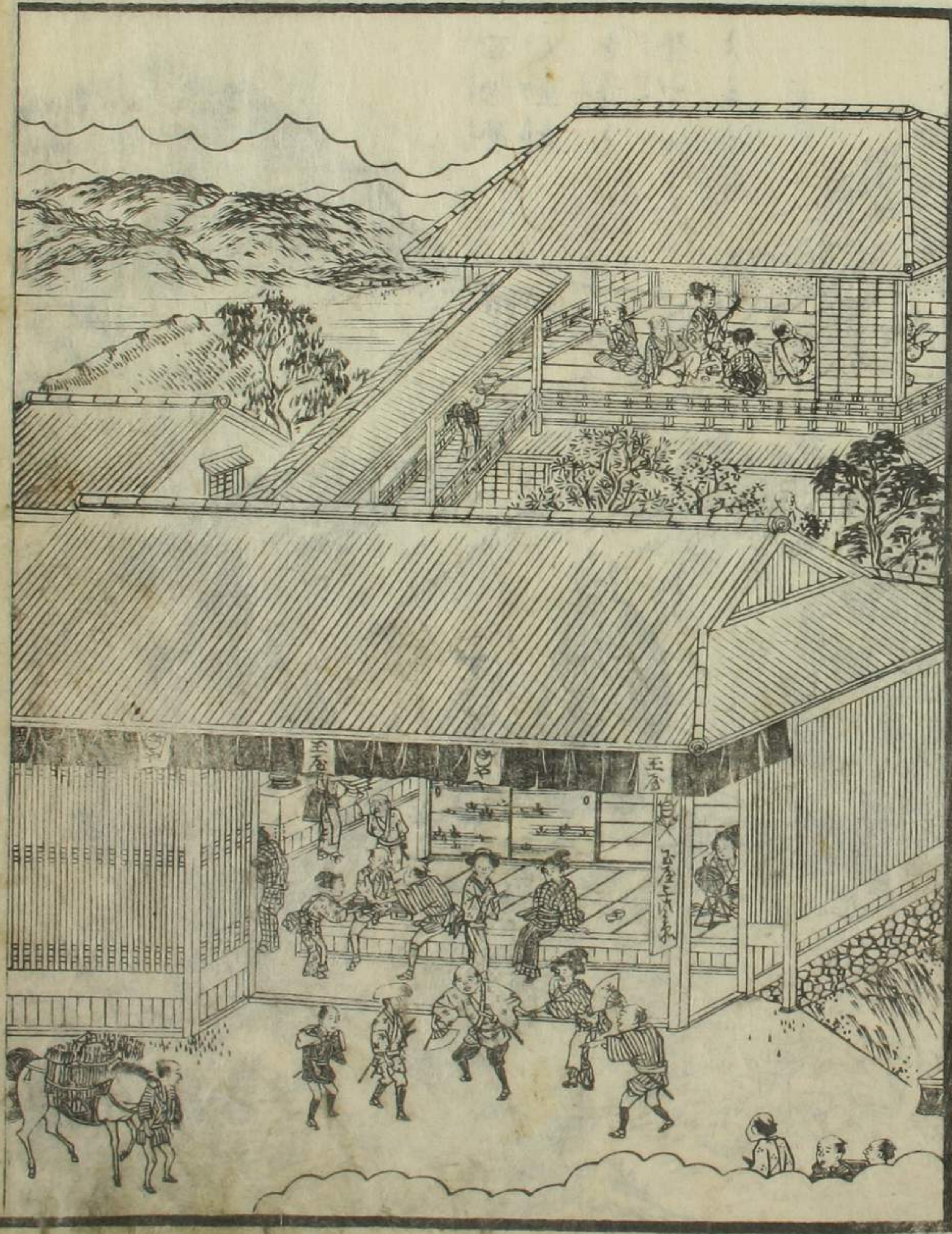
○ 物狂石學文路村内左側

○ 慈尊院道日村の内西

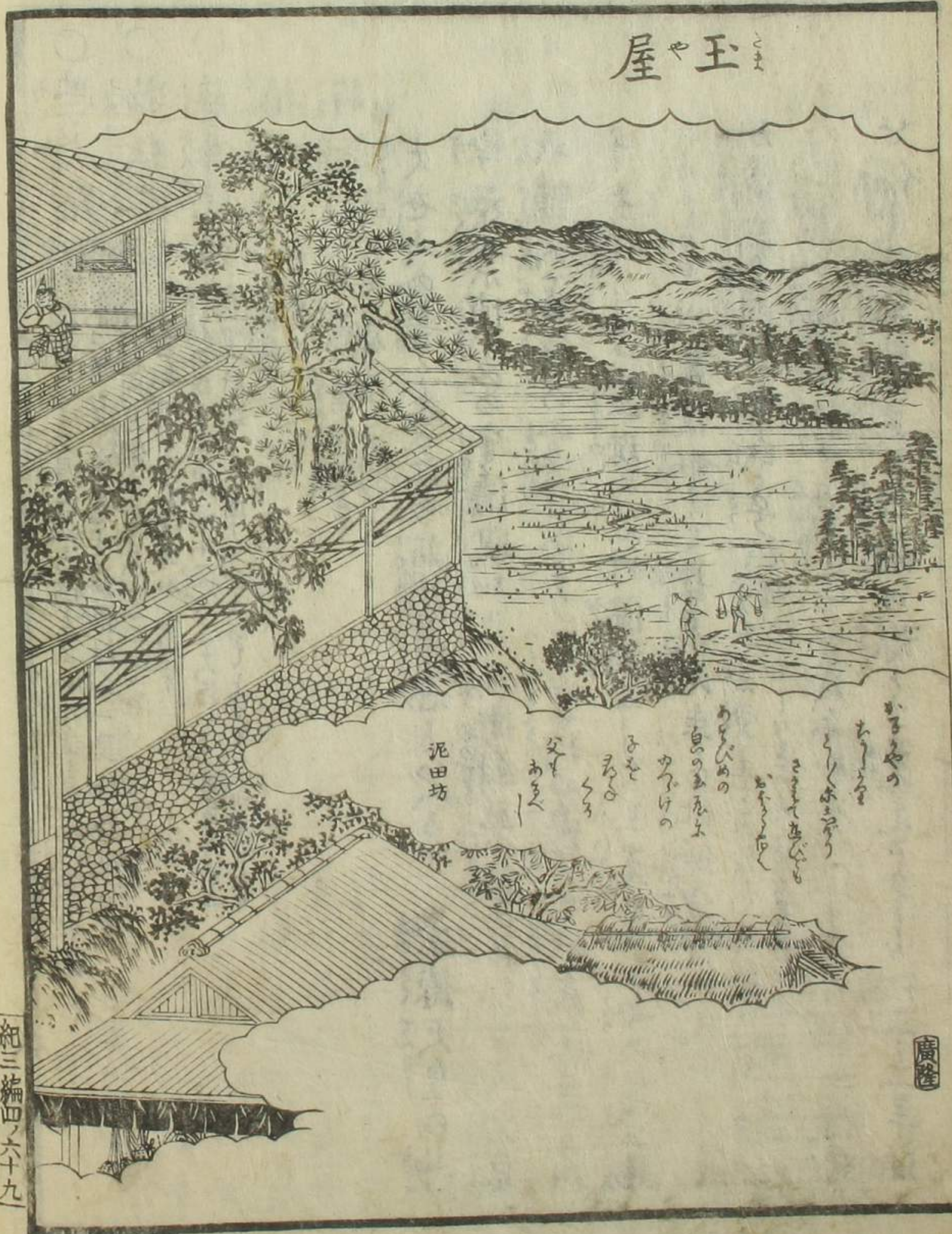
○ 梅天神日村の傍

○ 苜萱堂日村の北
夫を人の普くある所の苜萱道心と云ふ

宇奈紫博多の守護職加右兵衛尉兼昌の子あり父兼昌
八幡大菩薩の靈夢より石堂川の邊あり比彦菩薩の
手小持くまゝ宝珠の如く温潤あり且光あり母の懐小
くろくより以來懐妊して長養九年の比誕生せし人あり
加藤九衛門尉繁氏と号し卿名を堂丸と名付く苜萱の
仁徳を一國ふ絶し恩惠を四民ふかうありし月雪小侍
と録し飛松落葉と出離の媒とも見えたり仁平二年



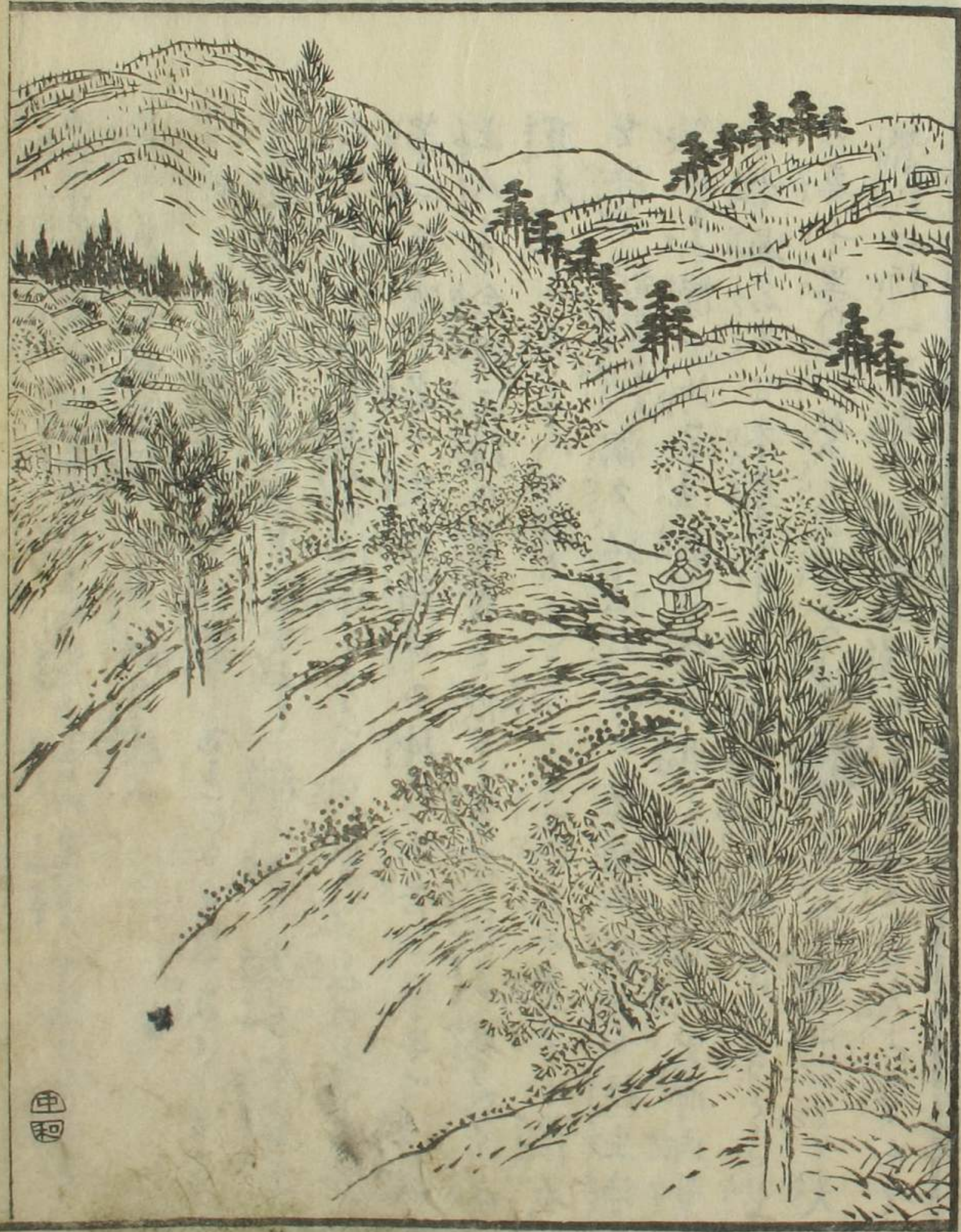
玉屋



泥田坊

玉屋の
 ちりや
 としんまやう
 こまてまぶら
 おちんちん
 あまの
 白のまぶら
 かたけの
 子ま
 ちん
 父
 あま

廣隆



甲



石動磨
父重氏
を尋く
登山する
ところ

三十六日

生の末園生ふ酒宴の坊うら花の會れ 孟中小落うとんく
老少不定の理と明くゆ子別の扇ふ

ゆらなく深山のたふ位果くあまのくこあや友ときりま
と書置く夜ふまはま城とあ都より黒谷寂空上

人のみりくふいう上人の化身ふうて別髪深夜の身とあう
等阿法師と名く生國箱崎の神れ御告を蒙るる法然

上人より念佛三昧の奥義と授る書夜称名急うあく永
分元年の春上人のみもととあ高野山ふ登るる隠家

と書置く此播と世人朝夕弘法大師の禪窟ふ詣で往生淨
土の素懐を祈る法然上人より賜るる弘法大師御筆

の十遍名号と本尊として念佛修行の功うけぬるる昔
の妻千里の前繁氏の母より傳へ持るるふと懐中しる夫

繁氏の行へと尋て播磨の國ふまると明るの大山寺あく

出産あつて男子ふ父の幼名をまて石堂丸と名け十四

歳のころ母満ともふ父繁氏の口くへと尋て此里ふきり

昔染紫より玉田典義次とつる浪人の今此里あて玉屋

典次とつる者の宿あて病の床ふ臥し後ふ永あ元年丙三

月廿四日の朝れ露と消えりてと健泰妙尊大姉と戒名

と授て葬るるかじ其墳墓は今播磨内ふつと石堂丸ハ

其翌年の娘れ比ふいゝるまで夜も母の墓所ふ供給し

昼ハ父の行方と尋て高野ふ登るる仁安元年の秋

高野山ふり父等阿法師ふ尋るる逢ひる等阿法師
ハ我父かうといふ後とと父繁氏入道ふ成りり出離
の要と従く曰くいゝ輪廻のまらふときり父といふて
う二度そのまらぬを結ひ捨らんやと尋るる逢ひる
とと定るる名とむ名のらとまら父母の恩を慕ひ値

遇孝養の志と運むむとあるが念佛修行してあまぐ
 浄土に往生し蓮坐と双々未來永劫の値遇と誓ひら
 まへ是こそ眞實の孝心なれと況んや理不伏し非
 等阿法師の弟子とあり信生法師と号して兩師諸も
 小念佛修行意をかく昼も此里ふ下も母の墓に詣り
 夜の高野ふ在る觀念の月をまじり師弟共一刀三
 禮ふ地藏菩薩の尊像を彫刻せり今當寺の親子地
 産の地蔵菩薩の尊像あり法隆國師年譜及室箇集
 下畧前書道心異傳あり法隆國師年譜及室箇集
 産の地蔵菩薩の尊像あり法隆國師年譜及室箇集

風ふらふるや堂のけし花今心と懐もるらん 玉川舎

○大師硯水 重中村の硯水あり大師作文の

○河根村 谷間と茶研の産地

親長記

文明十一年二月二十日立高野宿坊於兼と云所 縁歌ス

わさおまはいつけはらふまの國やかひのいさかきまきけ

○産土神兩社 旧村の入口

大智山日輪寺 別當

什物

公翁之面

治康

二月十五日竜神献之云今ふ八月十五日

○産物傘紙 日村と松守をふる傘紙

○鹽竈古跡 旧村の跡あり

○河根川 河根村の川

○千石橋 河根川に架かる橋

二月二日

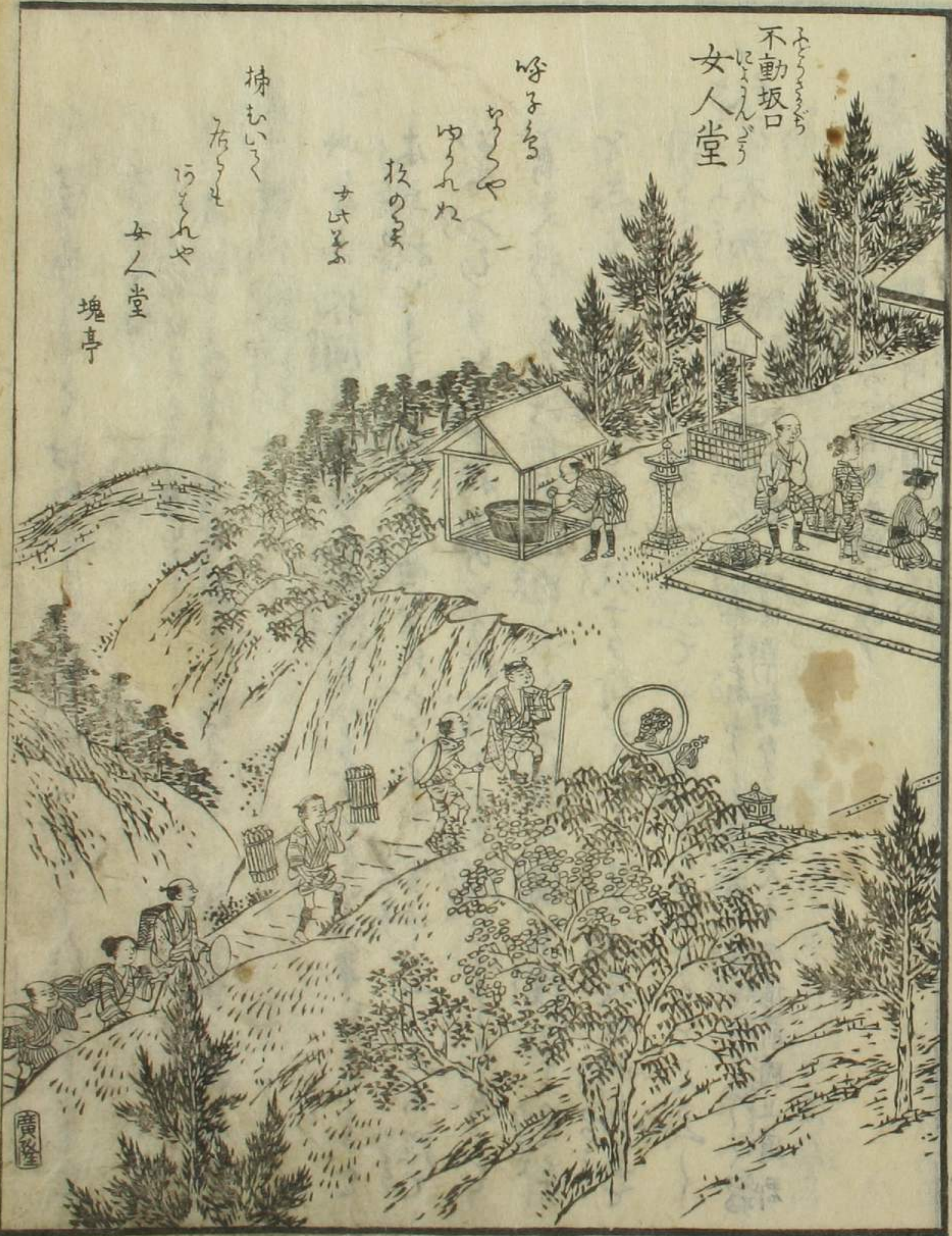
ふらふら橋らわらうらうらうらうら
 水村山郭酒旗風の次女古
 艶桃嬌奪晚霞のうらうらもうらうら
 さうらうらうらうらうらうらうら

○作水 西御の村

○櫻茶屋 作水にあり

作水にあり西御の村にあり
 櫻茶屋にあり作水にあり





三編四七十五

らうもさうさうさうさうさうさう物もかかればさうさうさうさう

らうらうぬ

山姥おやぢのうらうらうさうさうさうさうさうさうさう 放鷹子

○萬丈轉万丈轉
下の外初

此處より谷間と窺つる其深さいさうさうさうさうさうさう
本草枝とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
みら入らむを恐れそのさうさうさうさうさうさうさうさう
萬丈轉と名づけけり山内さうさうさうさうさうさうさうさう
と志とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
用さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
外の不動外の不動堂中堂中の安座安座威靈威靈を奉るさうさうさうさうさう
金剛金剛の堂堂大師大師の草創草創なり安座安座文年間備前國上道郡
入道入道と再建す
石不動石不動路傍路傍の安座安座不動の種子あり
大師の御所大師の御所薄かりとさう

○兒隴児隴
花折坂の
下

むい児の捨身せし事一傳一傳の清泉積翠萬豊の
中より流出しあふ至る直下千尺珠碎け玉踊る天工言
語の及ぶ所ふあはげ

○花折花折女人堂女人堂

参詣の諸客此所を花と折く大師大師を捧るもらう又さう
それむさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

○女人堂女人堂

諸國より参詣の女人投宿する所所七口
當山の内院内院の女女と禁する事古詳論あり今具今具は陳陳ずる不及
せんともいさう女児女児の為さう一端と述述ひ惟惟ふ大師大師豈豈婦女
と忌忌み終終るやさ誥誥記記して女女いあさ万姓万姓の本氏本氏族族と廣廣め
家門家門を繼繼とのさうさうはさうさう是と親親近近する時と互互ふ視

聴の慾ふ誘もして貞良如法の弟子とてとて意外の
過なきやとつと故ふ是と親むと尊くも諸悪の
根元嗷々の本かりと示しるまへ且弘仁聖主の
男の尼寺ふ入る尼の僧院ふ赴くと制しと入る迷源と
塞と慾根と断つ聖慮祖意の深と所と察知寸
若右信の女子一度登詣しと去の堂ふ宿し遙ふ
伽藍と拜禮し合縁聚塵の微賃ふ抱し以随分の功
徳と修せむも良縁ふ因く忽長夜の迷室と出く永
一真の覺殿ふ入し事とてとて

千首 山女郎花
白河七首 野亭女郎花
狂可集
花うささるるも女帝を女ふ事とて
百合とての地とてとて

師弟
融覺
唐衣橋洲
麥林

日南り流れまゝや 女人寺
妹よりなみとてえんぞ 女人寺

挂子
原松

○不動堂
納の不動とて大師の製しとて所かり
保延六年密嚴院覺錢上人大師ふ擬して入定せし
とて大衆大師の徳と奪つとてとて一時乱入しと
錢師を襲ふ錢師飛出く庭前の池ふ入る即本形
章都婆とてなり大衆まゝとて爰ふ來る錢師馳く此堂ふ
入る全身變じとて不動明王とてなり大衆等堂内とて現
ふ小明王二時ありとて推實辨じとて試し錐と膝
以て搦む錢師の變身血出ずとて還く御作の不動紅
血迸り出づ因く錐搦不動とて其後錢師出奔しと
根嶺ふ抵る

卯月のくさるる女の不知後と
つわつとよふわき



不動坂より
學文路迄の圖

其一

廣隆

○ ○
山心院各

○ 山人部屋
○ 投宿の婦女と接待し或の不良奇怪の者を
○ 追捕し其の山へ送りて七口しよふなり
○ 中笑ふなり

高野山をうきまみ山嶺の疑敷みらとかま
くふまけつゆけを茂き指の本れ間日棚裏
やまのるゆを誘ひ誘ひまきまきまきこの山の
林とらふみ今もうき雪う降りるは山の嶺を
こ時こふまきかむりやかむりやかむりや
なび照日ぞけむ照日やいよ輝く山あやふ
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
り山も古あつても直上り山も瑞雪ま恒ありり
霍公鳥ゆ音ゆづくなくまきまきまきまきまき
らやらやらやらやらやらやらやらやらやら
事とらふまきまきまきまきまきまきまき
此山



くろまきり
 茶折
 ちのまき
 児滝

西行
 舟

児
 名

小
 白
 河
 大
 門
 八
 角
 児
 の
 滝
 ち
 の
 ま
 き
 茶
 香

紀三編四七十九



其
 二

茶
 折
 ち
 の
 ま
 き
 小
 白
 河
 大
 門
 八
 角
 児
 の
 滝
 ち
 の
 ま
 き
 茶
 香

廣
 隆



此は...
不動橋
鬼士



其三

外の不動
万夫轉
不動橋

父母の
子
鬼士



四寸岩
平都婆木

嶺天

廣隆



其四

維子
父の
甲子
洗子

三編四八十一



廣隆

其六
 名不
 其乃
 其

記三編四ノ八十二

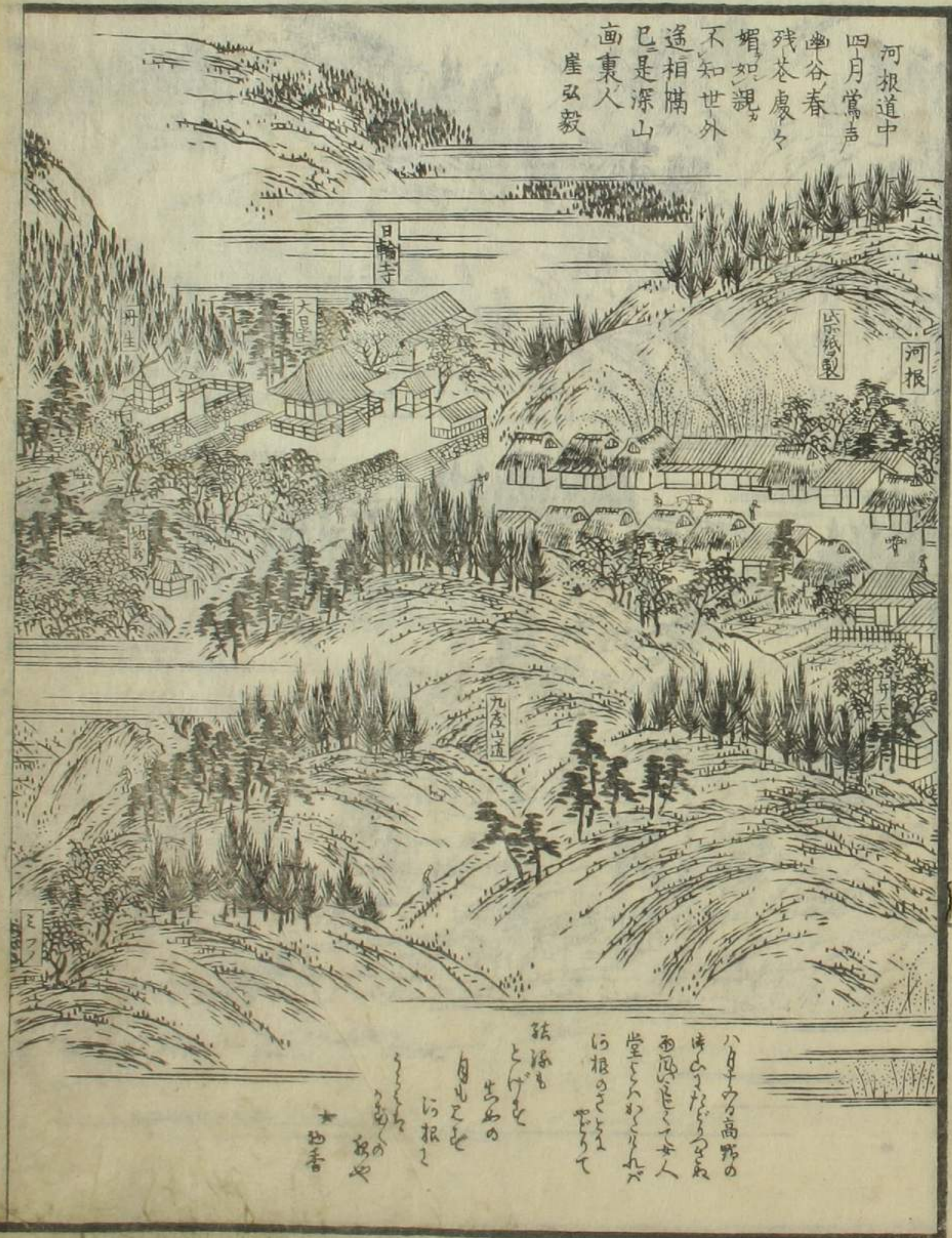


其五

神谷客亭
 車屋香丸脚底新
 草鞋来住息觀辛
 南山栲利三十院
 杖澤雲間遊旅人
 伊藤海橋

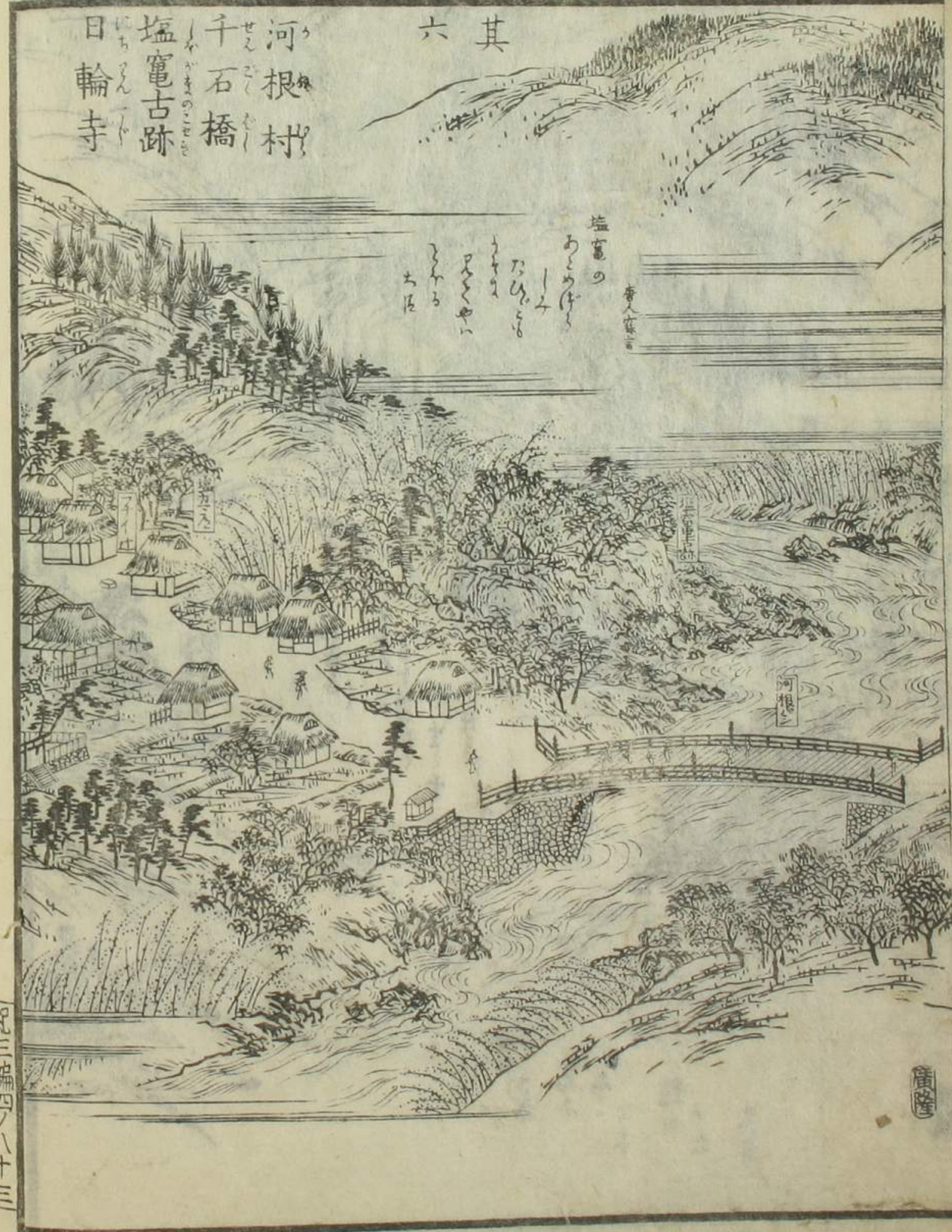
櫻茶屋
 神谷过

馬三



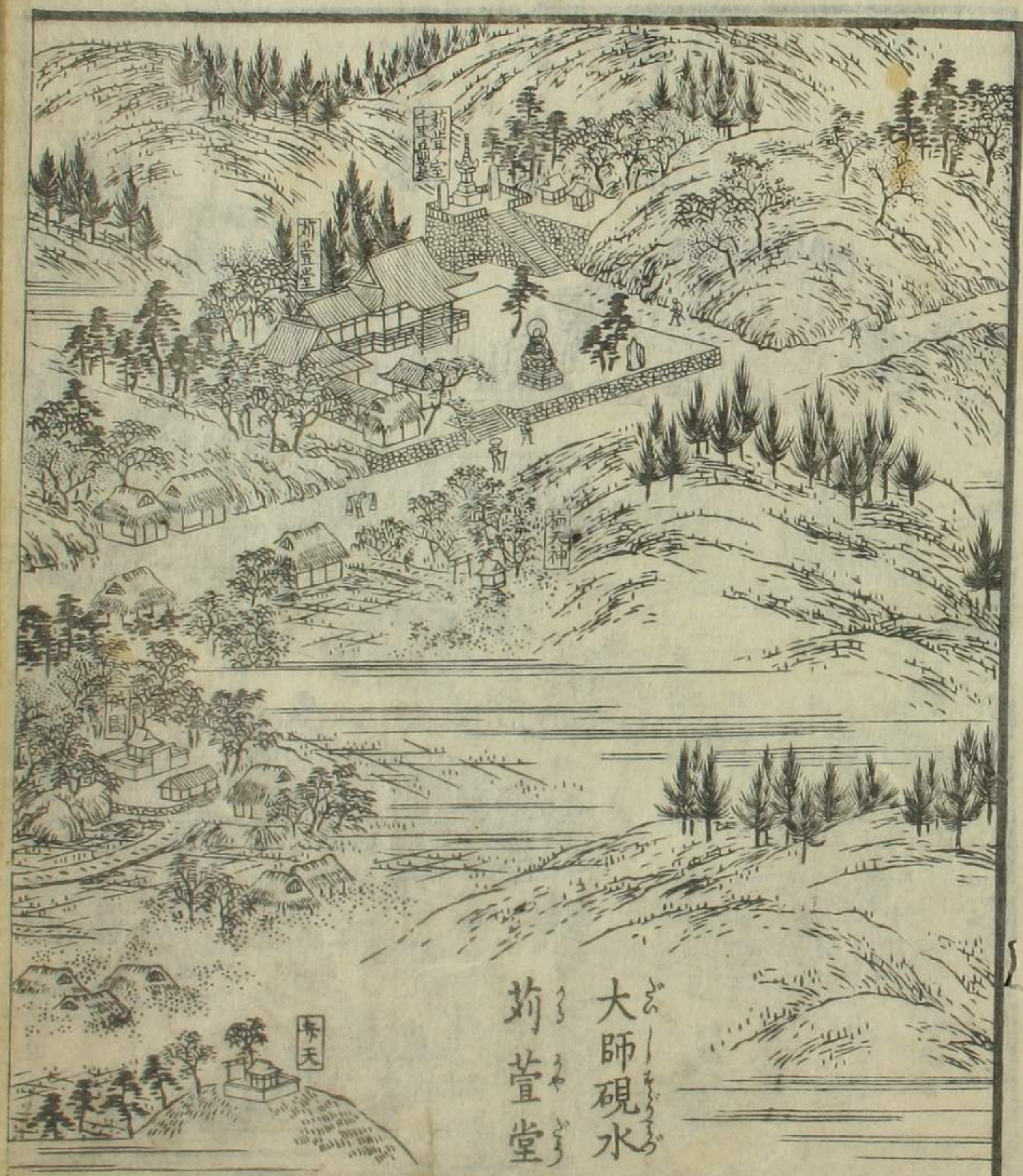
河根道中
 四月鶯声
 幽谷春
 残花處處
 媚如親
 不知世外
 遙相觸
 已是深山
 面東人
 崖弘毅

八日十の高野の
 清心寺の
 西院にて
 坐すに
 松林の
 影に
 坐すに
 松林の
 影に
 坐すに
 松林の
 影に
 坐すに



其六
 河根村
 千石橋
 塩竈古跡
 日輪寺

塩竈の
 古跡
 塩竈の
 古跡
 塩竈の
 古跡
 塩竈の
 古跡



大師硯水
均萱堂

紀三編四八十四



其七

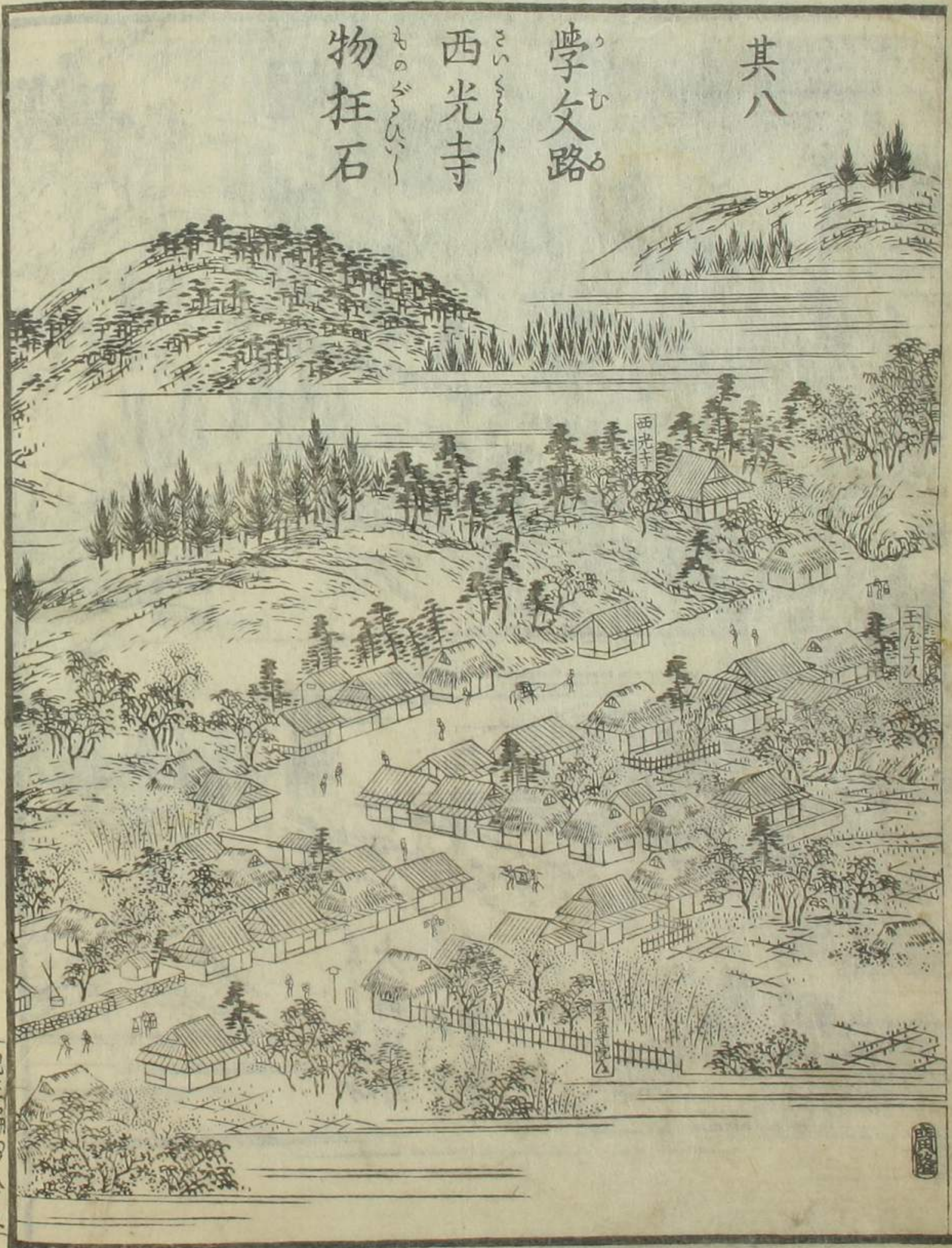
大師硯水

其八

學文路

西光寺

物在石



三浦巴十五

過學文路村
 行路崎嶇僕水危
 筍輿不穩而看差
 儂源恨未探春盡
 正是芳山花發時
 海嶠



幸る
 枯らん
 い
 玉事

高野山たかのやまのたかなるたかいへるたかく

我われまわれふわれるわれるわれるわれ

脚長あしなが金かね店てん

ささづづるる也や傘かさ紙しのの名な小こかかすす高たか野の山やまをを歩あははるる

此こゝ星せいのの都みやこをを我われ自じ物ものおおくくをを剛ごうとと言いふふ荒あららむむももままじ

目め小こままゆゆりり振ふりり物ものううぬぬるるわわくくぬぬるる人ひとももつつままをを

ののぶぶるるももつつ刷し毛け亦またふふとと行いくく星せい眼がんをを穿うるる

ししくく響ひびのの足あしのの八やつつををええるるもも新にい高たかのの膽いををつつぶぶるる

此こゝままつつるる酒さけををええるるぬぬるる也やももめめららううつつ伏ふせせ編あみみのの座ざをを

ららとと谷やををええるるはは新にい遠とほくく留とどももとと新にいささををいいここし

腹はらををぬぬるるぬぬるるももりり尊たうんとと山やまもも新にい高たか野の山やまをを

ええるる也やりりくくふふままくくををちちぬぬいいとと荷に持もち目めとと唇くち

ぬぬりり表うら光ひかりるる玉たまををちちぬぬるるくく飲の直ちかととををあ

紀伊國名所圖會三編卷之四高野山之部上 終

